



TITLE:

附: 髄膜炎時に於ける海馬部脳内への環状細胞浸潤の波及に就いて

AUTHOR(S):

登山, 威夫

CITATION:

登山, 威夫. 附: 髄膜炎時に於ける海馬部脳内への環状細胞浸潤の波及に就いて. 日本外科宝函 1952, 21: 29-30

ISSUE DATE:

1952-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/205416>

RIGHT:

- 血膿血症の一例, 同上, 37巻, 1-6号, 134頁.
- 9) 岡林篤, 敗血症血管間葉性組織反応に就て, 血液討論会報告, 第2輯, 159頁.
- 10) 岡林篤他, 実験的連鎖球菌感染症(ハツカネツミ鼻腔感染), 日本病理学会々誌, 38巻, 地方会号, 143頁.
- 11) 天野重安, 炎症特に其の基本型式の細胞生理学的解析, 日本医事新報, 1304号, 766頁.
- 12) 新保幸太郎, 最近に於ける炎症の諸問題, 同上 1322号, 1704頁.
- 13) 松山春郎, 敗血症流行性脳脊髄炎の15剖検例に就て, 日本病理学会々誌, 37巻, 1-6号, 136頁
- 14) 上村吉郎, パラチフスC菌症の病理解剖学的知見, 満州医学雑誌, 41巻, 2号, 163頁.
- 15) 和田セツ, 小児肺炎性脳膜炎に於ける脳病理, 臨床と研究, 24巻, 7号.
- 16) 武田勝男, 結核とアレルギー, 315, 344頁, 昭和23年, 東西医学社.
- 17) 武田勝男, 結核病変の成立とAllergy, 日本病理学会々誌, 37巻, 1-6号, 15頁.
- 18) 岡林篤, 感染の構造, 日本臨床, 8巻, 7号, 561頁.

附、髄膜炎時に於ける海馬部脳内への環状細胞浸潤の波及に就いて

(京都大學醫學部外科第一講座 荒木千里教授 指導)

南海電気鉄道病院 登 山 威 夫

Ring-like Cell Infiltration of the Hippocampus in Meningitis

Nankai Electric Railway Company Hospital in Osaka and the First Surgical Division, Kyoto University Medical School (Director: Prof. Ch. ARAKI)

by

Takeo TOYAMA.

In the microscopic preparations of the rabbit brains reported in the preceding paper, a peculiar infiltration of inflammatory cells was not infrequently observed in the hippocampus. Infiltrating round cells are seen to extend in form of a ring or double rings, closed or open, or sometimes fragmental. The infiltration can involve the wall of the temporal horn of the lateral ventricle. Because inflammation of the meninges especially of the transverse cerebral fissure is always associated with it the ring-like infiltration seems to occur in continuation of meningeal cell infiltration. There may exist potential cleavage lines in the hippocampus in form of rings or a whorl continuing to the subarachnoid space through the hippocampal fissure. There is good reason to believe so from the embryological standpoint. It is supposed that the same change may take place in human meningitis and the severest sequelae may be resulted.

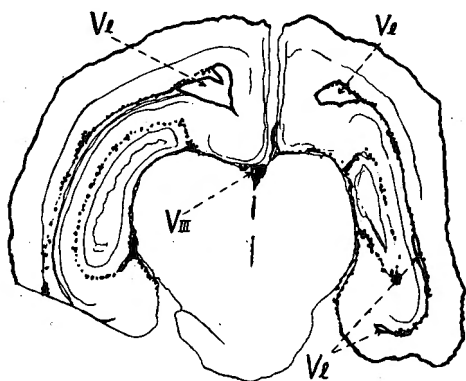
前掲の実験的脳膿瘍の研究に当つて、細菌を脳内に注射すると、脳膿瘍を生ずる場合にも、また生じない場合にも、軽重種々な程度の髄膜炎を生じた。その際、髄膜腔特に大脳横裂の炎症と共に、海馬部に特有な環状細胞浸潤の屢々起るものを見た。(代表的なものを示すと第1-3図の如くである。)

この環状細胞浸潤発生部位は、菌注入点から離れてゐるし、また菌注入は一側に行われているに拘わらず、

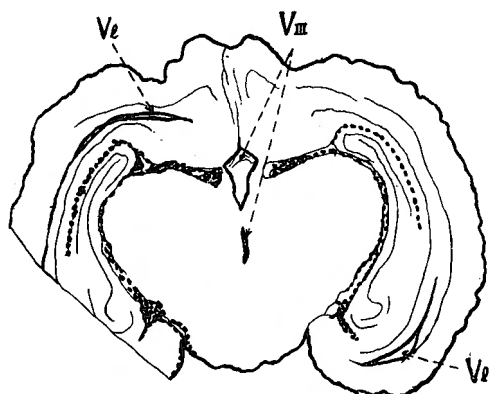
この変化は両側性のことが多い。即ち非注射側にも見られるから、これは菌液がこの部に直接注入されて起つた変化ではない。従つて、これは髄膜炎に伴う一つの変化、即ち髄膜炎の炎症がこの部の脳内に波及したものと思われる。

脳の他の部分には、かゝる環状細胞浸潤の変化が起らず、海馬部にのみ起るのは如何なる理由によるのであろうか。

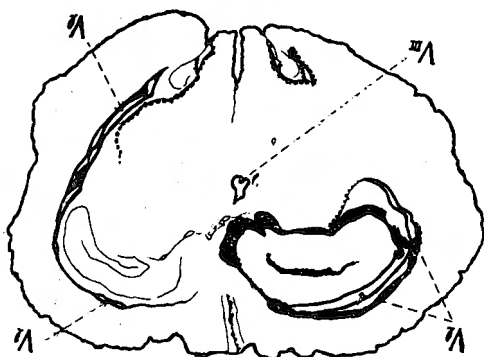
第 1 図



第 2 図



第 3 図



神経細胞の渦巻状配列によつても想像される如く、この部は、発生的に海馬回裂の所から蝸牛状に幾重にも捲き込んで形成されたものであるため、その裂溝が後日大部分癒着して閉鎖され、消えてなくなつてしまつても、もともと裂溝の存在した部分が、後日になつて、そこに髄膜腔と連絡した裂隙が、目には見えなくても、存在することが想像される。この裂隙に沿つて髄膜炎性の変化が内部に侵入したのが、私の標本に於ける環状細胞浸潤に相当するのではなからうか。

髄膜炎の際、かゝる裂隙に沿つて脳の内部に細胞浸潤が浸入する個所は、他に無い様である。

人間でも同じ傾向があるであらう。額疳、其他髄膜炎の時に、海馬部の変化が最も強いといわれるのは、他の脳部と違つて、髄膜から炎症性変化が特にこの部で脳内に波及し易いのではなからうか。

結 語

私の実験的研究に於て発生せる海馬部環状細胞浸潤は、海馬回裂の胎生学的の成因に起因するものである。そして髄膜炎が發生した際には、該部に細胞浸潤が波及し易いものと思われる。